

精神分析と無

ビオンと禪の交差

Psychoanalysis and Nothingness (Mu):
the intersection between W. R. Bion
and Zen Buddhism

松木邦裕, 西 見奈子編

ルディ・ヴェルモート, 西平 直,
松木邦裕, 清野百合, 西 見奈子著

金剛出版, 四六判 220頁, 3,300円, 2024年11月刊

(森田療法研究所・北西クリニック)

北西憲二

知的な刺激を受ける本である。評者は、精神分析にとりわけ理解を持っているわけでもなく、集団療法家としてのビオン（初期の業績）しか知らない。後期のビオンの提言を、禪のなかでも「無」という概念から照合し、新たな精神分析的な知のあり方と臨床の実践を模索する試みである。このような難しいテーマを扱いながら、評者のような門外漢でもとっつきやすいものになっているのはシンポジウムの記録と優れた本書の構成によるものだろう。

本書は、2023年11月2日に京都で行われた国際シンポジウムの記録「無心の対話（四）」を元にしたものである。ビオン研究の第一人者として知られているベルギーの精神分析家ルディ・ヴェルモート氏とビオンの理論に精通している精神分析家の松木邦裕氏がシンポジストで、哲学者の西平直氏が討論に加わった。おのおのの発表に加えて、西平氏の問いに答える形で、松木氏、ヴェルモート氏がさらに論を整理し、それに西見奈子氏、清野百合氏の論考が加わっている。そこでは禪の「無」から見た精神分析諸概念の再解釈と実際の治療への応用の試みなどが示されている。

松木氏が第1章、第2章で、ビオンの精神分析と東洋哲学（特に無心に注目）を精神分析の実践に落とし込む（直観と無心）試みについて述べている。ヴェルモート氏は第3章で、「無」からみた精神分析諸概念の再解釈を試み、それを受けて第4章で、西平氏がビオンの「O」と禪の「無」という視点からわかりやすく整理している。それぞれ西平氏の指摘を受けて、ヴェルモート氏（第5章）、松木氏（第

6章）がさらに論を進め、清野氏が、後期ビオンの「後期」と禪的思考の重なりについて、西氏が精神分析と宗教の関係について論評している。

ここで提起している問題は、精神療法の本質に迫る問題であり、後期のビオンの発表が大きな困惑とおそらく反発を招いたことは、想像に難くない。ビオンの提言は神秘主義や超越と結びつけられ、胡散臭いものにしてしまったようである（第1章、松木氏）。

本書を読みながら、精神分析という知の領域に禪（あるいは無）という理解を持ち込むことはいかに大変な作業であることが実感された。

宗教と精神療法は、危うい関係にあり、ある種の緊張関係をはらんでいるようにも思われる。精神分析は、評者の理解では最も注意深く宗教から遠ざかろうとし、明確なバウンダリーを引こうとした。著者らは、後期のビオンの精神分析に禪的な理解を持ち込もうとしている。これはある意味では知的な冒険であろう。言語、あるいは言語化を最も重視する精神分析に言語化を否定することから始まる禪の世界観は通常相容れないものであろう。特に「空」「無」とはそれ自体が言語化を拒むものである。

そこでは、三層構造という理論のモデルが重要に思われた。理性（第一領域）、自動的な心的機能（もの想い／第二領域）、西田のいう純粹経験（Oの領域、不可知の存在）というモデルである。それは「私」を置かずに世界を見ることで、「自我あるいは第二領域の死」であるとも表現される（第3章、ヴェルモート氏）

第三世代の認知行動療法がマインドフルネスを取り込み、ある意味では成功したのは、情動調整に着目し、脱仏教化したことによろう。東洋の心理学と親和性の高い森田療法でも、その異同について論議がなされている。

禪的な経験は、「無」と「行」が結びついている。これをどのようにして精神分析の実践に落とし込むのか、極めて興味深い。そのような意味でも、本書が精神分析に関心を持つメンタルヘルスの専門家のみならず、精神療法と宗教との関係、あるいは東洋的な世界観と精神療法の関係に関心を持つ人たちに奨めたい一冊である。